

水原：先ず統制しやすいものから始め、統制の困難なものはやれたらやりたいが。

竹内(千葉大)：この資料から学級別や教師別のプロフィールができれば。そうして比較研究をしてみたらどうか。

村瀬：学級のプロフィールはできている。しかし教師の方は個人差がある。それ故、今回は、統計的に処理したのである。

以上熱心な討議が交わされたが時間がきたので打ち切った。
(角谷辰次郎・田中熊次郎)

11. 集団力学・学級集団

420 パーソナリティーについての集団の価

穂山 貞 登(東京工業大学)

個人差のある成員の集団において、個人の価と集団の価との関係を検討するため、東京工大性格調査表の項目をQソートさせた結果について(3, 6, 12, 18, 12, 6, 3, 計60項目で、東京工大1年生30名による)、各成員の2者間の相関(435対)、評定法と見なしての総合得点(◎とする)、Cと各成員との相関を算出するとともに、Cを加えて31を全体として因子分析を行なった。435のrの α は、正規分布すると思われるが、個人差は大で、有意な相関をもつ相手の数で成員を分類すると bimodal、Cの成員に対する相関は成員間のそれに比して非常に高い。因子分析は、Cの負荷量がきわめて大な1因子、Cの負荷量がきわめて0に近い2因子の存在を予想して行なわれ、前者(ideal 因子)と後者のうちの ZP-SN 因子の関係において、Cが実際の成員と離れて位置すること、成員がまとまって、有意な構造を示すことを認めた。集団の価は、その抽象性を検討した上でならば、利用することが可能であり、とくに ideal なものとの構造的関連を指標と考える。

421 集団の心理学的構造分析と

発達の傾向の考察

——とくに確率構造マトリックスとの比較から——

田中熊次郎(東京学芸大学)

幼児から成人までの各時期の集団(すべて公式集団、計119)にソシオメトリック・テストを実施し、その資料から各集団の親和反発の関係構造をとらえ、なお発達の傾向を考察する。そのため、確率構造マトリックスを尺度として実際の構造マトリックスを検討する。実際の構造マトリックスは相互選択を基本として作製し、それに模擬しながら Monte Carlo Simulation を反復しその平均から標準確率構造マトリックスを作製する。各集団につきこれら2つのマトリックスの比較を行い、次のことがわかった。一般に各時期の集団を通じて、1下位集団

集中傾向、2孤立者分離傾向、3周辺者減少傾向、4上方選択傾向、5下方排斥傾向などが認められる。しかし細かくみると、1・3は発達とともに顕著となるが、2・5は児童期において最も著しく、その後は発達とともに緩和される。以上の事実を総合して考えると、集団成員の親和反発関係の偏倚は、構造次元でみた場合、児童期において最も大きく、青年前期がこれに次ぎ、その後は小さくなるといつてよい。

422 凝集性と生産性に対する協同と競争の効果

——社会的学習論の立場から——

古旗 安 好(福島大学)

主要な2点について次のように考察された。一つは Perf. について。5年 73gr ではどの課題に関しても協同は競争にまさる($p < .01$)。6年 60gr でも同様($p < .05$)。しかし凝集性のレベルの差(低LC中MC高HC)による Perf. の相違はみられない。ただ等価とみられる課題I V間の進歩度の検定からは、課題の性質によって、Cohes. のレベルと、Perf. との関連が暗示される。つぎに、Cohes. の変化に及ぼす効果について。LCgr では協同は Cohes. を高める($p < .01$)が、注目すべきはLC競争群でも信頼水準1%で Cohes. を高めるといえることである。だがMC+HCgr. での変化をみると、競争では明らかに消極的方向へ($p < .01$)、協同では積極的方向へ($p < .02$)増加する。つまり競争状況は特に比較的凝集性の高いレベルの集団構造を破壊する傾向があるといわなければならない。

今後の問題、言語的相互作用がある競争状況の集団過程について、協同との比較研究を通して検討する。

423 小集団における凝集性と行動類型

——教育場面への“FIRO 理論”導入の試み——

春日 喬(東京大学)

W. C. Schutz は 1958 年に“FIRO 理論”と呼ばれる対人関係行動に関する新しい理論を発表し、この理論を発展させることによる対人関係行動予測の可能性、集団

発表要旨・討論の概要

構造の把握と集団の発達変容把握の可能性を示唆した。FIRO は Fundamental Interpersonal Relations Orientations の略で“基本的対人関係志向”を意味する。Schutz は、対人関係欲求について仮定された包容、統御、愛情の3つの次元から対人関係行動を捉え、これに基づいて対人間の共存可能性の程度を、両立性 (Compatibility) として数量的に示し得ると考える。本研究はこの FIRO 理論に基づき、中学生男子5人集団20組について、自由会話、課題討議、集団作業を行わせて、対人間の認知を形成させた後、対人関係志向を FIRO-B 尺度で調べ、集団凝集性と両立性に関する理論の仮説の検証を試み、同時に、小集団における凝集性と“対人関係志向”について検討し、FIRO 理論のもつ教育場面での有用性についての手掛りを得ようと試みたものである。

424 場面集団活動の一考察

○黒江静子・松村康平・野口はつ江

(お茶の水女子大学)

前回大会発表の場面転換の研究にひきつづいて、日常生活場面での場面集団活動に対応させて、場面の特性を明らかにし、次の点を中心に考察することを目的とした。① 場面集団活動を規定している要因からみた場面集団活動の場面の分類。② 各場面集団活動の場面における「もの」の機能と特性。③ 各場面集団活動の場面における「志向性」の機能と特性。④ 各場面集団活動の場面における「集団」の機能と特性。⑤ 日常生活場面における場面集団活動の規定要因の作用の仕方。⑥ 場面規定要因の違いによる日常生活場面の多様性。⑦ 場面集団活動の発展に関する技法。

場面集団活動を構成している要素として、ここでは「集団」「もの」「志向性」「場面」の4つを考える。これらの要素の中、主としてどの要素がその場面で働くかということから、場面集団活動の規定要因として、物理規定性・心理規定性・集団規定性・社会規定性・志向規定性の5つの枠組をあげて考察をすすめた。

425 態度変容に関する研究

——子供に対する母親の態度に及ぼす

集団事態の影響——

原 岡 一 馬(九州厚生年金病院)

目的：これまで実験的に行った集団決定法及び積極的参加度の態度変容に及ぼす効果が、脳性小児マヒ児を持つ母親の不安を解消しなければならないという現場的要請にも有効であるかどうかをみようとするものである。

方法：被験者は脳性小児マヒ児を持つ母親29名、集

団討議の前後に子供に対する母親の不安度の測定を行って、その変化をみた。また、その変化度を積極的参加度、最初の不安度から分析した。

結果：

1. 集団決定法において用いてきた集団討議法は、脳性小児マヒ児を持つ母親の不安を解消する手段として有効であると思われた。
2. 集団討議への積極的参加度が大きければ、不安解消の度も大であった。
3. 最初の不安度が、不安解消の程度に有意に影響すると仮定したが、有意とはならなかった。

426 集団力学・カウンセリング研修会の評価

Tグループを中心として

○梁井迪子・関 計夫・篠原 忍(九州大学)

九州大学教育学部では1961年より毎年1回、約3カ月にわたって、集団力学・カウンセリング研修会を開催している。目的は、集団や個人に対する理解を深め、その運営、管理の技術を習得することで、対象は、主として全国の大学学生部職員、約15名である。この研修会の主なプログラムに、Tグループがある。Tグループとは、アメリカの NTL (National Training Laboratory) によって始められた、社会的感受性練磨のための集団である。わが国でこのTグループを組織的に、研修会として行うのは、比較的新しい試みである。実施方法は、trainer 1名、assistant 1名、observer 2名、member 7人で構成されたグループが2組で、12日間行つた。

このグループの効果測定のため、主我性—社会性テスト等の調査を行つた。

又、研修会終了直後、及び、半年後に、研修員による研修会の評価を調査した結果、研修会全体についても、Tグループ自体についても、後になるほど評価がよくなっていることが分つた。

427 前青年期のギャングにおける

リーダーシップの一考察

小林 さ え(実践女子大学)

〔対象と方法〕農村および都市の中学2年生男女各々600名計1200名を対象とし、質問紙法により友人形成の調査をし、これに事例研究を加えて、gang の集団形態やリーダーシップを考察する。

〔結果〕1) 前青年期の児童の大部分は、対面的小集団の友人グループ形成をして遊ぶ傾向があるが、中には、同じ性・年齢・所属その他の条件をもつ凝集度の高い、閉鎖的な gang を作って遊ぶものもある。2) gang の